

# 上代日本語の複合動詞の項構造について —二つの内項を取る場合を中心に—

鴻野 知 暁

## 1. はじめに

古代日本語では、動詞の取る格が現代語と異なる場合がある。例えば、上代の四段動詞「乞ふ」、四段動詞「祈る」は、「神を乞ふ／祈る」と、格助詞ヲを伴う。また、上代では上二段動詞「恋ふ」は通常格助詞ニを上に伴うが、中古ではヲも伴うようになる。特に、「動詞＋動詞（V1＋V2）」タイプの複合動詞の取る項をめぐる、次の三点が問題となる。

- ①項の果たす文法役割（主語、目的語など）
- ②各項がどの格助詞を伴うか、または格助詞を伴わないか
- ③どうしてその項を取るか（複合動詞の項構造が、「前項動詞 V1」の影響を受けるか、「後項動詞 V2」の影響を受けるか）

①から③を通じて、「V1＋V2」と動詞が複合した場合と、V1 または V2 の単独用法との場合を比較して考察する必要がある。本稿は、上代語と現代語とで複合動詞の振る舞いがどのように異なるのか、といった通時的な観点のもとで上記の問題を考えてみたい。

## 2. 先行研究

現代語の複合動詞について、統語的な観点から分類を行ったものとして、早くには長嶋（1976）、山本（1984）がある。これらでは複合動詞の取る項に付く格助詞に着目して分析がなされている。

影山（1993）は、「複合動詞の前項動詞が統語操作を受けるか否か」といった基準により、統語的複合動詞と語彙的複合動詞の区別を行った。これはその後の複合動詞研究に大きな影響を与えている。ただし、古典語の複合動詞は全て統語的であり、古典語研究では「語彙的」「統語的」の区別は不要であるといった指摘がある（青木 2013）。

国立国語研究所で公開しているデータベースの『複合動詞レキシコン』は、V1 と V2 の意味関係、複合動詞の項の関係の決定、といった観点から、現代語の語彙的複合動詞の語構造を次の四つに分類している<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> 影山氏の言語学的分析が背景になっているとのことである（『複合動詞レキシコン』、「語構造」のページによる）。

1. VV (動詞+動詞) : 2つの動詞がそれぞれ本来の意味と格関係を持つ (例: 「踏みつぶす」「押し開ける」)
2. Vs (動詞+補助的な動詞) : V1は本来の意味と格関係を持つが、V2は格関係がほとんど失われ補助的な動詞となっている (例: 「降りしきる」「晴れ渡る」)
3. pV (接頭辞化した動詞+動詞) : V1の本来の意味が希薄化し、接頭辞的になっている (例: 「差し迫る」「打ち重なる」)
4. V (一語化) : 二語で構成される複合動詞というより、一語として固定化していると認識される (例: 「(気分が) 落ち着く」「折り入る (折り入って)」)

なお、VV (動詞+動詞) のタイプでは、二つの動詞が同じ項構造を持つとは限らない。影山(1993: 106) では、複合動詞の項構造の決定について、次の三つの合成の仕方が挙げられている。

- a. 主要部<sup>2</sup>からの受け継ぎのみ: 「ドアを押し開ける」
- b. 主要部からの受け継ぎと所有関係の合成: 「服の汚れを洗い落とす」
- c. 主要部と非主要部からの受け継ぎ: 「夜の町を酒を飲み歩く」

(a) は V1 と V2 とが完全に同じ項構造を持つ場合である。(b) では、V2 の項構造がそのまま複合動詞に引き継がれ、さらに V1 の Theme 「服」が「汚れ」に対して所有関係にあるものとして補充される。(c) では V1 と V2 との目的語の意味役割が異なり、それぞれ独自の目的語が表出されている。

本稿では上記のような現代語の複合動詞の分類を踏まえ、網羅的な調査の上で、上代の複合動詞の分類を試みる。

### 3. 研究方法

古代語では主語や目的語が助詞を伴わない場合がしばしばあるため、動詞と項との文法関係を網羅的に探るのは容易ではない。このことを調査する手段の一つとして、統語情報付きコーパスの利用が考えられる。本稿は『オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス』(ONCOJ) のアノテーションデータを利用し、必要に応じて国立国語研究所『日本語歴史コーパス 奈良時代編』のデータを参照しながら研究を行った。ONCOJ は、オックスフォード大学の『オックスフォード上代日本語コーパス』(OCOJ) が元になっている。OCOJ は 2009 年に「日本語史における動詞の意味構造と項の具現化」プロジェクトのための研究ツールとして開発が始められた<sup>3</sup>。オックスフォード大学東洋学研究所によってアノテーション付与の作業などが進められていたが、2016 年に国立国語研究所との共同研究が決まり、ONCOJ の名前で開発が継続した。2018 年春に国立国語研究所から検索インターフェースとともにデータが公開されている。

ONCOJ には『古事記歌謡』や『万葉集』など、上代日本語の韻文の主要なテキストが収録されている。特徴として、「語彙素情報」「形態論情報」「統語情報」「文法役割・意味役割」など、

<sup>2</sup> ここでは主要部は V2、非主要部は V1 のことである。

<sup>3</sup> フレレスビグ (2014) を参照。

上代語の研究のための高度なアノテーションが付与されていることが挙げられる<sup>4</sup>。上記の情報は格表示・項の具現化の研究に、きわめて有用である。テキストの統語構造は樹形図によって表示することが可能となっている。

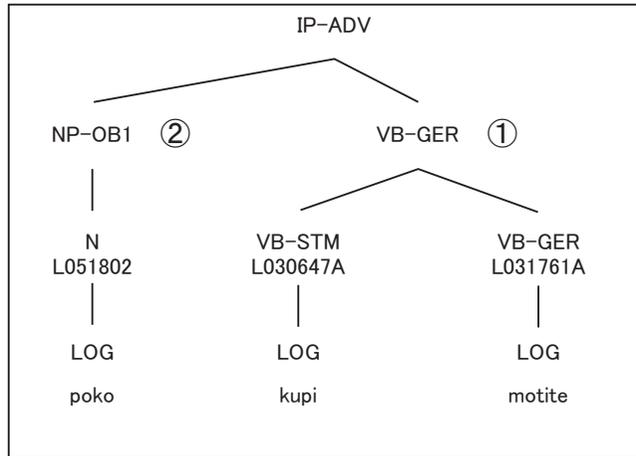


図1 「杵啄ひ持ちて」の統語構造

図1は、「白鷺の杵啄ひ持ちて（杵啄持而）飛び渡るらむ（万葉集3831歌）」の、下線部の箇所  
の統語構造を、樹形図によって示したものである。説明のために①、②の数字を加えた。kupi  
（啄ひ）と motite（持ちて）がそれぞれ動詞（VB）であり、これらが複合して①の動詞を形成し  
ている。ONCOJでは、動詞と姉妹関係にある名詞句に対して、文法役割の情報が付与されてい  
る。この例では②の名詞句が、①の動詞に対して直接目的語（OB1）という文法役割を果たす。

本研究はONCOJの統語情報を利用し、まず、「動詞+動詞」タイプの複合動詞を抽出した。  
次に、各々の複合動詞について、下記の情報を取得し、リスト化した<sup>5</sup>。

- ・複合動詞の各構成要素の見出し（複合動詞「持ち帰る」に対して、「持つ」と「帰る」）
- ・複合動詞が取る項
- ・項が持つ文法役割（主語、目的語、斜格語）
- ・項の具現化（どのような格助詞を伴うか）

さらに、「降り来る雪」のように連体修飾を行う複合動詞と、その被修飾名詞との関係を新たに  
調べ、上記リストに付加した。

なお、以下では『万葉集』から用例を挙げ、例文の後にその歌番号を記す。原文と訓読文は小  
学館『新編日本古典文学全集』に従い、解釈については他の注釈書も適宜参照した。

<sup>4</sup> 詳細は、ホーン他（2018）を参照。

<sup>5</sup> 意味解釈や統語構造の捉え方の相違などの理由で、コーパスデータの情報を修正したところがある。

## 4. 分析

### 4.1. 複合動詞の項構造のタイプ

先のリストを元にして、格・文法役割・意味の面から、複合動詞の取る項が V1、V2 どちらの要素に関係しているかを考えた<sup>6</sup>。次の例の複合動詞「居散らし」と「橘の花」の関係を見てみよう。

(1) 橘の花を居散らし 1755

(橘之花乎居令散)

V1の「居る」は自動詞であり、上代の資料を調べても「…を居る」という例は無い。一方、V2の「散らす」は他動詞であり、

(2) ほととぎす花橘を地に散らしつ 1509

(霍公鳥花橘乎地尔落津)

のようにヲ格目的語を取る例が見られる。このことから、(1)の「橘の花を」は、V1とではなく、V2と関係を結んでいると言える。

ONCOJを使って上代の複合動詞の項構造を調べると、大きくは表1のように分類される。なお、青木(2013)に従い、統語的／語彙的の区別はしていない。

表1 上代の複合動詞の項構造の分類

分類	項がどの要素に関係するか	複合動詞の例
タイプ1	V1	持ち帰る、言ひ継ぐ
タイプ2	V2	居散らす、出で見る
タイプ3	一つの内項がV1とV2の両方に関係する	取り見る、食ひ持つ
タイプ4	異なる二つの内項がV1とV2のそれぞれに関係する	思ひ暮らす、見明らかむ

本稿のタイプ3は、2節で引用した影山(1993)の「主要部からの受け継ぎのみ(ドアを押し開ける、の類)」のタイプに相当し、タイプ4は「主要部と非主要部からの受け継ぎ(夜の町を酒を飲み歩く、の類)」のタイプに相当する。内項が少なくとも一つ顕在化しているものの例数(異なり語数)は、タイプ3が300程度、タイプ4は50弱となっている<sup>7</sup>。「夜の町を酒を飲み歩く」のようにV1とV2とに関する異なる目的語がそれぞれ表出される場合は現代語ではきわめて珍しいが、上代語では相当数認められるのである。これは現代語と上代語の複合動詞の振る舞いの相違の一つと言ってよいであろう。また、タイプ4は統語構造上で興味深い特徴を持つ。以下、タイプ4の具体例を複合動詞ごとに整理し、項が意味的にV1もしくはV2のどちらに関わるかに注意しながら考察を行う。

<sup>6</sup> 複合動詞に対して目的格または斜格の関係にある項が、少なくとも一つは顕在化している(言語化されている)例を対象として調べた。

<sup>7</sup> 解釈の違い、訓みの相違などから用例の扱いに揺れが生じる(特にタイプ4)。

## 4.2. タイプ4の複合動詞

### A) 漕ぎ出 (づ)

まず、「舟を漕いで出発する。」(『日本国語大辞典』第二版)の意であるとされる「漕ぎ出」について、項の出現を見てみよう。

- (3) 海人娘子 棚なし小船 漕ぎ出らし 930

(海未通女棚無小船傍出良之)

- (4) 難波津を 漕ぎ出て見れば 4380

(奈尔波刀乎己岐渥弓美例婆)

- (5) 防人の 堀江 漕ぎ出る 伊豆手船 梶取る間なく恋は繁けむ 4336

(佐吉母利能保理江己芸豆流伊豆手夫祢可治登流間奈久恋波思気家牟)

(3) は「海人娘子」と「棚なし小船」とにともに助詞が付いておらず、格関係が明示的ではないが、意味的に前者が主語、後者が目的語である。「棚なし小船」はV2にではなく、V1に関する項である。(4) は「難波津」がヲ格を伴っていて出発点となる場所を示しており、V2に関係する項として顕在化している。(5) では「防人」が格助詞ノを伴っており、注釈書では主語として解釈している<sup>8</sup>。「伊豆手船」は「防人の堀江漕ぎ出る」によって連体修飾されており、「堀江」は助詞を伴っていない。意味的に考えると、「伊豆手船」がV1に関する目的語であり、場所を示す「堀江」はV2に関係している<sup>9</sup>。

「漕ぎ出」は二つの内項を取ることが可能であり、(5) のようにその両方が顕在化することもあるのである。二つの内項のうち一方が表現されない場合が、(3) や (4) の例であると考えることができる。

### B) 恋ひ来

「来」は単独用法として、「空間的に近づく」、「時間的に近づく」の二つの意味を持つ。この語は複合動詞の後部要素にもなり、単独用法の意味分化に対応して、「動作や状態が続きながら移動する」、「動作や状態がずっと続く」という、空間的もしくは時間的意味を表わす。

- (6) 天離る鄙の 長道を恋ひ来れば 3608

(安麻射可流比奈乃奈我道乎孤悲久礼婆)

- (7) 水隠りに恋ひ来し 妹が紐解く我は 2703

(水隠恋来之妹之紐解吾者)

(6) では「恋ひ来」が空間的意味を表すのに使われている。「長道」という経路がヲ格を伴って、V2の「来」に関係している<sup>10</sup>。誰かを恋いつつ来るのであるが、その恋する対象は言語化

<sup>8</sup>たとえば『万葉集釈注』の訳では「防人が難波堀江から漕ぎ出して行く伊豆手船、その楫を漕ぐ手の休む間がないように、」となっている。

<sup>9</sup>「堀江漕ぐ伊豆手の舟の梶つくめ(保利江己具伊豆手乃船乃可治都久米)4460」の例では、「漕ぐ」に対して「堀江」が目的語、「伊豆手の舟」が主語となっていると考えられる。「漕ぐ」の項構造には複雑な面があるが、(5) では「防人の」という主語が現われ、また、「漕ぎ出」と複合動詞になっているために、場所と舟の文法役割が4460歌の例とは異なっていると考えておく。

<sup>10</sup>単独用法の「来」が経路をヲ格目的語にとった例として、「道を来れば(路尾所来者)3791」がある。

されていない。(7) ではこれまでずっと恋い慕ってきた、という時間的意味で使用され、V1 に関する目的語が「妹」として現れている。

(8) 海原を我が恋ひ来つる妹もあらなくに 3718

(宇奈波良乎安我古非伎都流伊毛母安良奈久尔)

(8) は、経路の「海原」と恋する対象の「妹」の両方が言語化されており、空間的意味の「恋ひ来」がその二つを項として取っていることが明らかな例である。

時間と恋する対象とが顕在化しているものもある。

(9) 年月を恋ひ来し君に今夜逢へるかも 2049

(年月恋来君今夜会可母)

これは時間的意味であるが、文法的構造としては(8)と同様であり、一方の内項がヲ格<sup>11</sup>、他方の内項が被修飾名詞として現われている。(9)の構造で「時間+ヲ」をことさらに表わさないものが(7)である、と考えることができる。

### C) 見(み) 明らむ・見(め) し明らむ

『時代別国語大辞典 上代編』では、下二段の他動詞「明らむ」に、「明らかにする」と、「心を明るくする。思いを晴らす」の二つの語義を挙げている。複合動詞となった、「見明らむ」には「何かを見て、そのことによって心を晴れやかにする」の意があり、「見し明らむ」はその敬語形である。

(10) ますらをこの木の暗繁き思ひを見明らめ心遣らむと布勢の海に小舟つら並めま襷掛けい  
漕ぎ巡れば 4187

(大夫乃許能久礼繁思乎見明良米情也良牟等布勢乃海尔小船都良奈米真可伊可気伊許芸米  
具礼婆)

「見明らめ」のV2に関する目的語が「…思ひを」と顕在化している。『新編全集』の頭注に「(布勢の水海を) 見て心を晴し」とあるように、V1に関する目的語は、後続する文脈中で言い表されている。

(11) 御心を見し明らめし活道山木立の茂に咲く花もうつろひにけり 478

(御心乎見為明米之活道山木立之繁尔咲花毛移尔家里)

(11)の例では、「御心を見し明らめし」が「活道山」を連体修飾しているが、連体修飾節内のヲ格目的語がV2に関係し、被修飾語がV1に関係するものとして解釈される。この文構造を保ったまま現代語に訳すことは難しいが、「(その山を) 見ることで御心をお晴らしになったという活道山」の意である<sup>12</sup>。

<sup>11</sup>ヲは訓み添えであるが、注釈書で異訓は生じていない。

<sup>12</sup>『新編全集』では、「御心を見し明らめし」に対して「(活道山を) ご覧になっては思いを晴らされた」という頭注が付されている。

## D) V + 暮らす

「暮らす」は、他動詞として「時を過ごす」の意味を持ち、「春日暮らさむ（波流比久良佐武）818」のようにしばしば「日」を目的語にとる。「暮る」とは自他の対応関係にある。『日本国語大辞典 第二版』で「他の動詞の連用形に接続して、その行為を一日中し続ける意を表わす。」と記述されるとおりで、上代から複合動詞の後項として使用されている。

(12) 霞立つ春の永日を恋ひ暮らし夜も更け行くに妹も逢はぬかも 1894

(霞発春永日恋暮夜深去妹相鳴)

「…永日」は時間を表わし、V2 と関係を持っている。恋する対象は目的語となって現われてはいないが、文脈上、「妹も逢はぬかも」の「妹」であると理解される。

(13) 越の海の信濃の浜を歩き暮らし長き春日も忘れて思へや 4020

(故之能宇美能信濃乃波麻乎由伎久良之奈我伎波流比毛和須礼弓於毛倍也)

『新大系』で「越の海の信濃の浜を歩き回って過ごし」と訳されるとおり、「…浜を」は「行く」という動作の行われる場所である。(12) と異なり、時間に関する語が目的語として顕在化していないが、それは「長き春日」であると後続文脈で述べられている。

(14) 相思はぬ妹をやもとな萱の根の長き春日を思ひ暮らさむ 1934

(相不念妹哉本名菅根乃長春日乎念晩牟)

佐佐木 (2012) の注 4 で、「相思はぬ人をやもとな（不相念人乎也本名）614」などと比較して、1934 歌の「妹哉」にヲを訓み添えるべきであると述べられており、これに従う。この歌は二つの目的語がヲ格を伴って出現しているものであり、同論文では、「妹を思ふ」という表現と「長き春日乎念ひ暮らさく [十・一九三六]」という表現とを一つに統合したような形式になっている」と述べられている。1934 歌および 1936 歌の「長き春日を」は、時間を表わす語がヲ格の目的語となって「暮らす」と関係している。さらに、「妹」が思う対象として、目的語で顕在化したのが 1934 歌である。佐佐木氏の言う「一つに統合したような形式」は、「思ひ暮らす」がタイプ 4 の複合動詞であるゆえに生じた表現なのである。

A) から D) にあげた複合動詞では、V1 と V2 に関係する二つの項が顕在化している例 ((5)、(8)、(9)、(11)、(14)) を含んでいた。以下の E) と F) は、V1 由来の項もしくは V2 由来の項のどちらか一つが顕在化し、それぞれの例が認められるものである。

## E) 呼びとよむ (下二段)

「とよむ」は活用型による自他の対応があり、四段活用では自動詞（鳴り響くの意）として、下二段活用では他動詞（鳴り響かせるの意）として働く。下二段の「とよむ」の取る内項には声・音 ((15) の例) と場所 ((16) の例) の二種類があり、いずれか一方が項として顕在化する。

(15) あしひきの山彦とよめさ雄鹿鳴くも 3680

(安之比奇能山岨故等余米佐乎思賀奈君母)

(16) 里とよめ鳴き渡れども 4180

(里響喧渡礼騰母)

以上を踏まえた上で、複合動詞「呼びとよむ」(下二段他動詞)の取る項を見てみよう。

(17) さ雄鹿は妻呼びとよむ 1047

(狭男壯鹿者妻呼令動)

(18) 木の暗の繁き谷辺を呼びとよめ 4192

(許能久礼乃繁谿辺乎呼等余米)

(17) の「妻」はさ雄鹿が呼びかける対象であるので、V1 に関係している。一方、(18) の「谷辺を」は場所であり、「とよむ」の単独用法と考え合わせると、V2 に関係する項であると言える。呼びかける対象と場所の両方が目的語となって現われた例は無い。

#### F) 踏み+V

(19) 朝狩に鹿猪踏み起し夕狩に鳥踏み立て馬並めてみ狩そ立たす 926

(朝獮尔十六履起之夕狩尔十里蹋立馬並而御獮曾立為)

「鹿猪踏み起し」は、一見「鹿猪」がV1とV2の両方に関係しているように見えるが、そうではない。「踏み起こす」は「地面を踏んで鳥獣などを驚かす。鳥獣を狩りたてる。」の意である(『日本国語大辞典 第二版』による)。すなわち、「鹿猪」はV2にしか関わらず、言語化されていない「地」という目的語がV1に関するのである。「鳥踏み立て」もこれと同様に解釈される。

(20) 新室を踏み鎮む兎し手玉を鳴すも 2352

(新室踏静子之手玉鳴裳)

これは「新室の地を踏んで、地霊を鎮める」ということであり、V1に関する目的語は「新室」と現われているが、V2に関する目的語が言語化されていない。

「呼びとよむ」、「踏み+V」では、文脈に応じて、V1由来の項もしくはV2由来の項のどちらか一方が顕在化し、他方は言及する必要がないものとして潜在化しているのだと考えられる。両方の項が同時に顕在化する例はないものの、やはりタイプ4の例として認めることができる。

#### 4.3. タイプ4のV1・V2の特徴

前節ではタイプ4とされる複合動詞について、具体例とともに観察した。タイプ4の語群のV1・V2と内項の意味関係を調べると、意味的な選択制限<sup>13</sup>が認められる。例えばC)の「見明らか」では、何を「見る」かは文脈によるが、何を「明らか」かは「心」と決まっている。これまで挙げていない語を含めて、選択制限について表2にまとめた。この選択制限によって、顕在化する各々の項がV1とV2のどちらと関係を結ぶかが定まりやすくなり、また、項が潜在化していてもそれを補って解釈することが容易となっている。

<sup>13</sup>これは辞書に記述されるような性質のものである。

表 2 V1・V2 と内項との選択制限

複合動詞	V1 または V2 の選択制限
明かし釣る	(夜を) 明かす
掘り掘う	(地面を) 掘る
踏み起こす、踏み鎮む、踏み立つ (下二段)	(地面を) 踏む
呼び響む (下二段)	(声を) 響む
漕ぎ出、漕ぎ出づ、漕ぎ渡る	(舟を) 漕ぐ
見し明らむ、見明らむ	(心を) 明らむ
思ひ暮らす、恋ひ暮らす	(日を) 暮らす
恋ひ渡る	(時間を) 渡る
恋ひ来	(時間を) 来
恋ひ来、忘れ来	(場所を) 来
漕ぎ出、漕ぎ出づ	(場所を) 出づ
漕ぎ渡る	(場所を) 渡る

#### 4.4. タイプ 4 の統語構造

先に (14) として挙げた、「相思はぬ妹をやもとな菅の根の長き春日を思ひ暮らさむ 1934」の統語構造を、同内容の現代語の表現と比較して考えてみよう。内項と述語の部分を取り出して現代語に訳すと、およそ「あの人を長い春日を思って暮らすことか」<sup>14</sup> のようになる。これは文法的にかなり不自然な文として受け取られる。これは、「あの人を一思って」と「長い春日を一暮らす」との係り受け関係が (21) のように交差してしまうためである。

(21) あの人を 長い春日を 思って 暮らすことか



語順を変えて (22) のように交差しない入れ子型の構造にすれば、問題なく解釈される。

(22) 長い春日を あの人を 思って 暮らすことか



上代語の複合動詞ではなぜ (14) のような文が許されるのであろうか。本稿では、「思ひ暮らす」が一体化して、「思ふ」と「暮らす」の項構造も結合し、二つの内項を取るような項構造が新たに生まれたからであると考えたい。「思ひ暮らす」という一つの述語に対して二つの目的語が係り受け関係を結ぶので、(23) のように交差構造は生じないこととなる。

(23) 妹を 長き春日を 思ひ暮らさむ



現代語の (22) の構造で伝達されるのと同じ内容を、一つの述語に圧縮して表現したものが、上代語の (23) の文であると捉えられる。

<sup>14</sup>現代語では「思い暮らす」が複合動詞として容認されにくく、また、項の取り方も上代語とは異なる可能性があるため、「思って暮らす」と、あえてテを介して述語が二つあるように訳しておいた。

(11) の「御心を見し明らめし活道山」をこのとおりの語順で「御心を御覧になって晴れやかにした活道山」と訳すと不自然であるのも、上述の例と同様、現代語では係り受けに交差が生じるからだと考えられる。「見し明らむ」を一つの述語と捉えれば、係り受けに交差関係が生まれることはない。この現象を理論的にどう説明するかについては他の方法もあろうが、現時点ではおよそ以上のように考えている。

## 5. おわりに

本稿で中心的に見てきたタイプ4の複合動詞とは、二つの内項を取るものであり、意味的にはそれぞれの内項がV1またはV2に、別々に関係を結ぶものであった。統語的には、複合動詞が単一の述語として働き、二つの目的語を取ると考えるのが妥当である。

影山氏は複合動詞の項構造の決定について、基本的には右側(V2)の項構造を引き継ぐと考えている。しかし、タイプ4の例数の多さは、上代語ではV1が積極的に項構造の決定に参加していたことを意味する。

複数の内項の存在は、意味解釈を複雑にする。時代が下るに従って、項構造の類似した動詞の複合の方が、より好まれるようになっていったのではないかと考えられる。

## 参考文献

- 青木博史 (2013) 「文法史研究の方法—複合動詞を例として—」『日本語学』32-12.  
影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房。  
佐佐木隆 (2012) 「二つの目的語をもつ上代語の構文—助詞「を」の機能—」『人文』10.  
長嶋善郎 (1976) 「複合動詞の構造」『日本語講座4 日本語の語彙と表現』大修館書店。  
フレレスビッグ, ビャーケ (2014) 「オックスフォード上代日本語コーパス」『日本語学』33-14.  
ホーン, スティーブン・鴻野知暁・バトラー, アラスティア・小木曾智信・フレレスビッグ, ビャーケ (2018) 「「オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス」の公開」『日本語学会 2018 年度秋季大会予稿集』。  
山本清隆 (1984) 「複合動詞の格支配」『都大論究』21.

## 参考 URL

- 国立国語研究所 (2014) 『複合動詞レキシコン』 <https://db4.ninjal.ac.jp/vvlexicon/> (2018年9月28日確認)  
国立国語研究所 (2018) 『オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス』 (Version 2018.9) <http://oncoj.ninjal.ac.jp/> (2018年9月28日確認)  
国立国語研究所 (2018) 『日本語歴史コーパス』 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/> (2018年9月28日確認)

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、オックスフォード大学の Bjarke Frellesvig 教授にご助言をいただいた。また、国立国語研究所の Stephen Wright Horn 氏、オックスフォード大学の Kerri Russell 氏に、複合動詞が取る項のリストの作成を助けていただいた。心より感謝を申し上げる次第である。本研究は、平成 28 年度人間文化研究機構若手研究者海外派遣プログラムと JSPS 科研費 15H01883 の助成を受けたものである。